

のうち一一の引用がある。また、これらの『小品方』以外から引用されている処方の方の占める率は『外台秘要方』では五二回の記載のうち三六回、『医心方』でも三九回の記載のうち二六回である。このことは、二つ以上の文献に記載され、比較的多くの本にみられる処方には単方が多いことを示している。また、七世紀までの主要な医書のうちでは『千金方』に最も多く『小品方』の処方が引用されている可能性が高いことを示している。

#### まとめ

『小品方』から後世の医書に引用された処方の構成生薬は単方が多く、その用法は多種であり、内服と外用の比は三対一で、内服では煎用と丸散剤とがほぼ同数である。

『小品方』の処方は、七世紀以前には『千金方』に最も多く伝えられた可能性が高い。そしてそれらの処方は救急用の処方などが多く、単方が多い。『医心方』、『外台秘要方』、『千金方』といった医書には、救急時に簡単に処方できるものが『小品方』から選ばれた可能性が強い。この傾向はとくに小児門で強くみられる。

(開業)

## 書籍目録に見られる一七世紀後半 の流通医書

平馬直樹

日本の伝統医学の発展史において、一七世紀の後半は、後世方派医学の確立期と古方派医学の興隆期のはざまにあつて、一見歴史的意義の乏しい時期のように見える。しかし、この時期は中国医学の受容と普及の面で、飛躍的な発展を見た時期とも言える。

一六三九年までにいわゆる鎖国体制が完成し、対外交渉は厳しく制限されたが、江戸初期には積極的に中国文化の移入が計られた。その媒介となるのは、殆ど書物のみに限られた。この時代の日本の医学の姿を知り、さらには一八世紀以降の独自の発展を理解するためには、当時の医家がどのような医書を学習していたかを把握することが重要である。

江戸時代前半の目覚ましい文化の発展の一要素として見過

すべからざるは、出版文化の興隆である。一七世紀中葉までに京都を中心に、出版業が経済的に成り立つようになる。書籍が商業的に流通し、出版物の目録が印刷され流布するようになる。書籍目録は寛文期以後のおよそ一五〇年間に繰り返し出版され、医書を含め、私家版を除く書店に流通する出版物をほぼ網羅しており、当時の出版状況を知る基本資料である。これらの多くが、慶応大学斯道文庫より『江戸時代書林出版書籍目録集成』として影印出版されており、その調査は容易である。同集成収録本から、遺漏が少なく、よく流通したとされる寛文一〇年（一六七〇）刊の『増補書籍目録』と、元禄五年（一六九二）刊『広益書籍目録』を中心資料に、一七世紀後半の流通医書の傾向を調査した。

A 『増補書籍目録』二卷二冊。その刊記から刊行年が特定できる最古の書籍目録。内容体裁とも整い、その版式と著録様式が以後の目録に踏襲される。三六門に分類され、医書部門には二四七種の書が収載されている。

B 『広益書籍目録』五卷五冊。元禄までの刊行物を多数網羅。以後も摺印を重ね、江戸時代の書籍目録の代表的存

在。分類は四六門。医書部門には四四三種が収載されている。

収載医書の書名は必ずしも正確でなく、撰者名も付されていないものが多く、漢籍の翻刻か、和医書か不明のものもあるが、A・B二書から当時の出版医書の傾向を分析する。

一六七〇年刊のAの収載医書のうち、百種余りが漢籍医書の翻刻であり、四四種が漢籍の解説書や頭注書、八〇種余りが和医書である。漢籍医書は次のように分類できる。

①『黄帝内经』・『難経』・『千金方』・『諸病源候論』・『三方』・『傷寒論』・『金匱要略』も収録されている。②後世方派の拠り所とする金元・明初の医書、『丹溪纂要』・『医学正伝』・『玉機微義』・『東垣十書』など。ちなみに後世方派の教科書ともいえる『啓迪集』に引用される六四種の中国医書のうち、四四％にあたる二八種が収録されており、曲直瀬流の影響は強大であった。③『赤水玄珠』・『医学入門』・『類経』・『証治準繩』などの一七世紀の新来医書。薛己・龔廷賢・李中梓ら明代の啓蒙的医家の著作が多数収録され

る。

次に和医書の著者は、最多の著者は曲直瀬道三であり、その他も玄朔・岡本玄治ら曲直瀬の学統の医家が大部分を占める。主な漢籍基本典籍は、その解説・頭注書が刊行されているが、それらの撰者は、吉田意安・松下見林・古林見宜・饒庭東庵ら儒学の素養の深い医家達である。

Aより二二年後の一六九二年に刊行されたBには、Aに収録される医書はほぼ悉く載っている。新たに加えられたおよそ二百種が、この間に刊行された医書と考えてよいであろう。そのうち漢籍は約四〇種、その解説・頭注書は約四〇種、和医書が約一二〇種である。すなわち和医書が飛躍的に増えて、全体の半数近くを占めるようになった。漢籍の一部は従来の刊行書の新版や改刻版で、新たな翻刻医書は少ない。一六六一〜八四年の清朝による遷界令により、輸入書籍が激減したことも一要因であろう。解説・頭注書では、岡本一抱の活躍が顕著である。和医書の新たな著者として目に着くのは、名古屋玄医・中山三柳・北山寿安らである。他に通俗的和医書が夥しく出版されている。

まとめると、一六七〇年までの流通医書は、漢籍医書と

その解説・頭注書が主で、基本典籍は既に網羅的に翻刻されている。この時期までの出版物は、曲直瀬流医学の影響が顕著である。一七世紀末には漢籍の注解書と、とりわけ和医書が増大し、啓蒙的・実用的医書が多くなる。一七世紀後半は、中国医学の忠実な受容から、医学の日本の展開への転換期であったことが裏付けられるが、なお通俗化の段階に留まっていたとも見られる。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所医史学研究室)